小川ナビゲーターのショート解説
◆映画「カラーパープル」の見どころ◆

- 1985 年作品、1986 年(27 年前)公開。WB 作品。
- スティーヴン・スピルバーグ監督の初めてのシリアスドラマ。
- 第 58 回アカデミー賞で、作品賞、助演女優賞(2 人)など、10 部門(11 人)で候補に挙がるも無冠(珍しい！)。娯楽映画を一貫して作り続けていたスピルバーグが賞狙いに走ったことに対する会員の拒否反応とも。
- ウーピー・ゴールドバーグ(セリー役)を原作者アリス・ウォーカーが抜擢。映画デビュー作でいきなりアカデミー主演女優賞候補。第 43 回 (1985 年) ゴールデン・グローブ賞 主演女優賞(ドラマ部門)
- 助演女優賞2人(珍しい！)は、シャグ役のマーガレット・エイヴリー(歌手・女優)とソフィア役のオープラ・ウィンフリー。甲乙つけがたい名演。
- 1900 年代初頭のアメリカ南部。そこに根強く横たわっている人間差別の構図。
  ①性差別:男⇒女(性の暴力。DV)セリーの父親(実は育ての親)⇒セリーへの近親相姦と出産(40 年後の子どもたち 2 人との再会)。嫁いだ相手の“ミスター”による人格無視と DV。
  (創世記 3:16)「わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」
  ②人種差別: 白人市長夫人ミリー⇒黒人たちへの恐怖感、反抗者への虐待(ソフィーへの長期懲役)。
  ③律法主義差別:義人・聖人(シャグの父親・牧師)⇒罪人(娘シャグ＝ミスターの愛人、酒場の歌手)。
  ④ステータス差別: 強者(アフリカの鉄道会社)⇒弱者(ネティーたち)の貧困者診療施設の強制撤去。
- 40 年にわたる強者⇒弱者の差別・抑圧(権力、暴力による)が、セリー、ソフィア、スクィークの抵抗と脱出によって終わりを迎える。セリーを人間性に目覚めさせたのは、シャグのセリーに対する愛と友情(美しいキス。美しい歌「シスター」)。“お前は醜い女だ”⇒“あなたは美しいわ”。
- ラスト 30 分のカタルシス:
  ★ここで「神の愛」がテーマとして前面に。①牧師と娘シャグの和解:
  教会(聖の世界)の礼拝で: 賛美「神の話を聞こう God tries to tell you」
  酒場(俗・罪の世界)で: 恋愛歌「あたしの言葉を聞いて Let me tell you something」
  この 2 つの歌の群れが、神の教会の中で 1 つになって、牧師の父(神)と放蕩娘シャグ(人)は40年ぶりにハグし合って;
  「Hey, Daddy, sinners have soul, too.パパ、罪人にも魂はあるのよ。」(この映画のキーセリフの一つ)
  ②セリーと妹ネティーの40年ぶりの再会。出産時に取り上げられた子どもたちオリヴィア、アダムとの初めての再会。⇒天国の前味。
  ★それを可能にしたのが、悔い改めたミスターの、移民局での渡航費用を用立てての妹一家のアメリカ招待。姉妹の喜ぶ姿を遠くから眺め、立ち去る。これが、彼なりの“償い”の仕方。
- 原題「カラーパープル」のいわれ: ラスト、シャグとセリーの“紫の野”(コスモスか？)での対話。姉妹の濃淡の「紫」の衣装。「パープル＝紫」は高貴な色。長い間、2人にとって“高嶺の花”だった色が、ついに今、自分のものに。黒い肌は変わらなくても、人は“カラーパープル”(高貴な魂をもって)に生きられる。以後エンドクレディットまで、全てパープル色！
- ≪結び≫
  (詩篇 119:71)「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」
  (コロサイ 3:14)「これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」
  (ローマ 8:28)「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」
  ★神の最高の被造物である人間の自由と人格は、人間の罪のゆえに、いっときは抑圧されていても、やがて必ず回復の時が来る。それを可能にするのは、“神の愛”である。この愛なくして、人は生きられないのだ。
  ≪完≫